

# ウタと共に生きる

－沖縄・本部半島の音楽文化(2)－

酒 井 正 子

な き じん ナ コー シ と な き  
今帰仁村字仲尾次 渡名喜マツさん 《ミャークニー》歌詞集 (続)

[1890 (明 23) 1.13～1993 (平 5).1.11, 享年 104 才]

注 1) 1983 年頃より 1992 年にかけて、孫の渡名喜一江さんが聞き取って翻字した原稿をもとにした。おおむね仲尾次方言で歌われている。

2) 収録順にまとめたもので、歌詞の順番は特に決まっていない。

3) 基本詞型は 8886 音の琉歌調 4 句体である。

4) 一般に琉歌の解釈は、短い音数の中に様々な含意が凝縮されていて極めて多義的である。ここでは生前マツさんから聞いたことや実際の歌の状況を基本にした収録者の一江さんによる解釈やコメントを、なるべく逐語的かつ簡潔に示した。

5) 歌の状況としては、たきぎ取りの歌の仲間 4, 5 人がいつも集まって、お茶や仕事のかたわら、上句を歌うと下句を返すというあそびをしていた。即興でいくらでもでき、受け答えのセンスは抜群だった。解釈には受け答えのニュアンスが反映されている。

6) 理解を助けるために適宜漢字をあて、固有名詞や動植物の名称はカナ表記した。

7) ( ) は解釈の補足 [ ] は異伝 \* は一江さんによるコメント, \* R は『琉歌大観』の類歌, \* S は酒井によるコメント。

8) 1～25 は『湘南国際女子短期大学紀要』第 5 号 (1998.2) に掲載した。

26. かなさしとう<sup>たい</sup>二人や まあにうていんたんか／ふちやがていや見らぬ たげに  
ひちみ

愛し合っている二人は、どこにいても真向かい／面と向かっては見ない、互いに盗み見

\*ちょっとした機微がよくうたってあると父が笑っていた

27. うたたぶていぬすが ぬじゃたぶていぬすが／いぬちたぶりばる わたみない  
る

歌を貯めて (惜しんで) どうする, 得意技を惜しんで何になる／命を惜しむのが、我が為になる

28. 遊<sup>あし</sup>ばんり我<sup>わ</sup>んや ちむたがていうしが / あくまゆむ親<sup>うや</sup>ぬ にんびしかぬ  
遊ぼうと思って私は、肝違えて（じりじりして）いるが／憎らしい親の、寝付かないことよ
29. 酒ぬみがいちや 笑ていひちゆたしが / でいかりいちゃくとう なだみうとうち  
酒飲みに行くには、笑って行ったが／さあ帰ろうというと、涙を落とす（帰りたくなかったのだろう）  
\*情景がそのままうたっており、面白い
30. うたすんでいゆそぬ 笑わりらはじやしが / うたや畑<sup>はる</sup>道ぬ さかいでむぬ  
歌いながら行く、と人は、笑うかもしれないが／歌は畑道の、栄え（楽しみ）だから  
\*畑仕事に行く様子をうたっている。労働のつらさをはねのけて楽しくする明るさ、前向きの姿勢がよく出ている。
31. うたやしゆらばん なまりうた\*<sup>1</sup>しゆな / わんやなまりうた しかんあいる  
歌をうたうならば、いいかげんにうたうなよ／私は不まじめな歌は、好かないですよ（へたでも一生けん命やれよ）  
\* 1 ふざけるような、中途はんばな歌いかた
32. ひちゃま木<sup>1</sup>ぬたむぬ むちぶさやあしが / ゆびなちゃぬぼうじゃーが ぬくみたむぬ  
ヒチャマ木の薪を、持っていきたいけれど／夕べ生まれた坊が、暖をとる薪だから（向かないからやめる）  
\* 1 パツと燃えてしまうので焚き始めは楽だが、ゆっくり暖をとるのに向かない
33. たるがきていうたぬ 里<sup>さと</sup>やとうじかめてい / なくなくにわぬや 持ち<sup>む</sup>ちるしゆる  
頼りにしていた、あの人は妻を娶ってしまったから／泣く泣くに私も、夫を持つ
34. じゅりゆばがばたき なだち花<sup>1</sup>さかち / ゆばんしが畑<sup>ばたき</sup> 庭ぬくしれえ  
遊女を呼ぶ人\*<sup>2</sup>の畑は、草ぼうぼうさせて／呼ばない人の畑は、庭の造りのよう（手入れが行き届いている）  
\* 1 白い花が咲き、ほっておくと臭くなる  
\* 2 遊び好き（なまけもの）
35. くうはちやが死ぬら さだみねんいぬち / りちやようちはりてい 遊<sup>あし</sup>ば\*<sup>1</sup>どうしび  
今日明日死ぬか、定めない命／さあばあっと、あそぼう仲間たちよ  
\* 1 歌踊りであそぶこと
36. ちむやねんいちょてい 口<sup>くち</sup>や花さかち / あねぬちむちらに わちむくいたが  
肝（心、思い）が無いくせに、口は花咲かせ（うまいこと言う）／あんなところ無い人に、我が肝を呉れたか（と悔しい）
37. あんちいぐまちゃぬ 七月<sup>な</sup>なとういさ / いちが八月ぬ はしびないら  
あんなにも待ちかねた（話しでもちきりの）、七月（盆）になった／何時八月の、

遊び日になるか (待ちどうしい)

38. 昔からくまや 親からぬやしち／うちみぐいみぐい 玉ぬやしち サーサカリ  
ユシ\*<sup>1</sup>

昔から此処は、親からの屋敷／たびたび出入りする、玉の屋敷

\* 1 めでたい、縁起がよいという意味のハヤシ詞

\* 家誉めの歌。実家に帰ると必ずうたっていたという。

39. わたむげていならぬ さかなやちうていてい／ありが親<sup>うや</sup>ちよでえや [あきよわが  
親や] しきんならぬ

腹が煮えくり返る、遊女に落ちて (売られて) しまって／あれの親兄弟は [あ  
あ、我が親は]、世間に顔向けできない (はずかしい)

\* 今帰仁からも女郎売り、糸満売り (漁師奉公) がいっぱいいた。親兄弟が食べていくため  
に。

40. ぴやくみやぬしちに\*<sup>R</sup> 義理<sup>じり</sup>りちんあが／ぬがよ此<sup>く</sup>ぬしちに 義理<sup>じり</sup>でいあ  
が

百まで生きない世間 (短いこの世) に、なぜ義理なんかがあるのか／何故この世  
間に、義理があるのか

\* R 205 百<sup>ひゃく</sup>見だぬ世界に (百才まで生きることのできない短い世の中)

41. 親<sup>うや</sup>ぬ生<sup>な</sup>しみせや じゅりんりや生<sup>な</sup>さぬ／あわりからなたぬ じゅりるやゆる

親が生みなさった時には、遊女になるよう生んだのではない／あまりの生活苦か  
ら、なった遊女なのです

42. 此<sup>く</sup>ぬ里んかなさ あぬ里んかなさ／たるにかたじちゅが さだみぐりさ

この人も好き、あの人も好き／誰にかたづいてしまおうか、定めにくい

\* おばあちゃんの18番だった。

42. 夫<sup>うと</sup>やむちゅらばや しじゃ夫や持ちゅな／しじゃ夫や持ちば わ自由ならぬ

夫を持つなら、年上の夫を持つな／年上の夫を持つと、自分の自由にはならない

\* あんまり年上だと命令的になるから。

百才すぎてから、子供を生む夢をみたといって笑った。「結婚したいんじゃないの? 年上がい  
いの、年下がいいの」と聞くと「当然年下がいい。ごはんも作ってくれるし」といって笑っ  
ていたことがある。話しの中にすぐミャークニーが出てきて、たまたま書き留めたのが、こ  
れだけの数になった。つらい思いもしているが、ジョークに託し、プラス面に生かしてい  
る。

43. 夫<sup>うと</sup>むちゃい行かば くがりゆなにせ小<sup>ぐわ</sup>／夫<sup>ふ</sup>振<sup>ふ</sup>やい来<sup>く</sup>りば 二人<sup>ふたり</sup>がうちゆ

結婚してしまったら、思い焦がれるな青年／夫と別れてきたなら、二人の浮き世  
(世界は二人のもの、想うがままよ)

44. いちいめが里<sup>さとめ</sup>前 かじりしちうちゅか／かじりすぬ夜<sup>ゆる</sup>や うまちいもり

いついらっしゃるのあなた、決めておきましょう／約束した夜は、ここにいらし  
て下さい

45. 大<sup>やまとたび</sup>和旅すしや みちゅなりばいめさ／いちいめが里<sup>さとめ</sup>前 かじりしちゅか [ぐそぬ  
旅すしや ちゃ入りくまい]

大和旅すれば、三年たてば帰ってくる／いついらっしゃるのあなた、約束しておきましょう [あの世に旅すれば、ずっとむこうに行ったまま]

46. <sup>さと</sup>里ちゅいがゆいに 村までいんかなさ／<sup>さと</sup>里ちゅいがぬきば 村んぬちゅさ  
好きな人の故に、村までも愛しい (懐かしく近い)／好きな人さえ居なければ、村からも心が離れる
47. <sup>あみ</sup>雨ぬふていぱりてい かゆるたぬ里や／しまなりがひちゃら はていんねらん  
雨が降っても晴れても、かよってきたあの人は／島に慣れて(私にあきて)しまったのか、音沙汰もない
48. いちめある<sup>くんじ</sup>紺地 肩うていていねらぬ／なまるさち<sup>とっじ</sup>妻ぬ くとうやうみる  
一枚しかない紺地の着物は、肩袖が落ちて無い (袖がほころんでしまった)／今になって妻の、事がおもわれる (ありがたさがわかる、しのばれる)
49. ちむんちむならぬ なぐさましみそり／なぐさます夜や、とうじんないさ  
心がうちひしがれ (身も心もかきむしられるようで) どうしようもない、どうぞ慰めて下さい／慰める夜は、妻になるさ
- \* 思ったままそのまんま歌ってある
50. ぬんあらないちよてい 口や花さかち／<sup>くら</sup>暗しみぬばんた とうめていとうぬが  
何も心がないのに、口は花咲かす (うまいこといって)／闇夜の崖を、捜して落ちたい

\* おかしい、こんな歌ってあるかと父が言う。人を憎まず崖に憎しみを転化する、沖縄的表現。例えば「恨む比謝橋や 情ねん人ぬ 我ん渡さと思てい 掛けてい置ちえら (恨めしい比謝橋よ、非情な人が私を渡そうと思って掛けて置いたのか)」という歌がある。恩納村出身で、18才で悲劇的な死を遂げたといわれる伝説的な遊女、吉屋チルーが、7才で仲島に売られる時に嘉手納村境の橋の所で詠んだとされる。親に売られるが、親には憎しみ一つもかけず、恨みは橋にかけている。

51. 十七、八なていん あしびわしりらぬ／さんしんや<sup>ひ</sup>弾ちば ちむやわらび  
十七、八<sup>\*1</sup>になっても、遊びは忘れられない／三線を弾けば、心は子供になる (色々な悩みなどないから)
- \* 1 昔は結婚年齢
- \* 上句と下句が他の歌と入れ違っているかもしれない (晩年は度々そういうこともあった)
52. 昔すぐりたぬ 花じゅみぬていさじ／なまや色<sup>いろ</sup>さみてい むとうぬ<sup>しろじ</sup>白地  
昔は素晴らしかった (鮮やかだった)、花染めの手拭い／今は色さめて、元の白地 (昔はあつあつだったが、今は思いがさめてしまった)
53. あがりあかがりば <sup>すみな</sup>墨習ればひちちとう／<sup>かしらゆ</sup>髪結いみそり <sup>わうや</sup>我親がなし  
東が明るくなったら、墨習い<sup>\*1</sup> (学校)へ行きます／髪を結って下さい、我が親様 (お母さん)

\* 1 仲尾次の海の近くに、墨習れ石 (平らな岩) がある。そこで勉強したと伝えられる。

\* R 2504 よく引き合いに出される勧学の歌

54. みやらびぬちむや すじはなぬ木ぬ葉<sup>\*1</sup>／すぎばすぐかたね うているかたら  
娘心は、木の先端の方の葉のようだ／風がそよげばそよぐ方に、なびいて語る (風の吹く方に素直になびく)

\* 1 やわらかくてなびきやすい。集団でうごく。

55. 年寄<sup>としゆ</sup>たんとうむてい 鏡<sup>かみ</sup>とうてい見<sup>み</sup>ちゃとう／なまとうしやゆらぬ むとうぬ  
十八

年寄ったと思って、鏡取って見たら／まだ（まだどうして）年は寄らない、元の十八才

56. しちくわんし\*<sup>1</sup>すばや 波<sup>なみ</sup>あらしどうくま／吉屋<sup>ゆしや</sup>ウミチル\*<sup>2</sup>が 荷物<sup>もつ</sup>捨てていてい  
シチクワンシ（地名、海、崖？）の側は、波の荒い処だ／吉屋ウミチルが、荷物を捨てて（船が沈みそうになったから？）

\* 1 ウミチルの墓場所のあたりか \* 2 は 50。参照

57. くんどうくんしちや ぐくんでいぬうゆえ／えいぬふんしちや 生<sup>う</sup>み子<sup>こ</sup>め一だ  
ち

今年此の月は、ご婚礼の御祝／来年のその月は、赤児を前に抱く

\* S 奄美では同内容のものが婚礼の祝い歌としてよく歌われる

58. ハンジャトゥムイ\*<sup>1</sup>登<sup>のぼ</sup>てい にし向<sup>むか</sup>かていみりば／見るかたやねらん いひやと  
海とう

ハンジャトゥムイに登って、北に向かってみれば／みえるものはただ、伊平屋島と海のみ。

\* 1 仲尾次の地名。家から海にむかって10分ほど歩くとある小高い丘（ムイ）。眺望が開け、古宇利島、辺戸岬、伊平屋島、伊江島がみわたせる。周辺は畑（ハル）。

59. もうらば里<sup>さと</sup>前<sup>め</sup> しんじんとうけえもうり／なまりも一いすしや 我<sup>わ</sup>んや好<sup>し</sup>か  
ぬ

舞うならばあなた、心底から舞いなさい／なまけ舞いをするのは、私は好かない

60. 鷹<sup>たか</sup>ぬ落<sup>お</sup>てい鷹や しこふ小<sup>こ</sup>にないさ／じゅりぬ落<sup>お</sup>ていじゅりや ぬ役<sup>やく</sup>たちゅが  
はぐれ鷹は、みみずくにはなるが／墜ちた遊女は、何の役にたつか

\* 勉強しなさい、と叱咤激励する歌か？

61. 別<sup>わか</sup>り〔離<sup>はな</sup>り〕ていやいきば 情<sup>なさけ</sup>ちよんねらぬ／うたにくいかきてい うりる情  
別れていくのに、情さえ無い〔離れていると、情はかわせない〕／ただ旋律に言葉<sup>ことば</sup>をのせて歌う、それが情けのしるし

\* S 沖永良部島に同内容の死者への別れ歌がある。

62. うむかじぬたたば さたすたんとうむり／夢<sup>ゆめ</sup>ふかく見<sup>み</sup>らば 死<sup>し</sup>じゃんとうむり  
（私の）面影<sup>おもかげ</sup>がたったら、うわさしていると思って下さい／（私の）夢を深く見たら、私が死んだと思って下さい

63. 雨<sup>あみ</sup>降<sup>ふ</sup>いぬ夜<sup>よる</sup>や 雨<sup>あみ</sup>んなじきゆさ／雨<sup>あみ</sup>ふらぬ夜<sup>よる</sup>や ぬなじきゆが

雨が降る夜は、（来ないのは）雨のせいにもするが／雨降らない夜は、何を口実にするか（ふられてしまったとは思いたくない）

64. だきぬ葉<sup>ちゆ</sup>ぬ露<sup>る</sup>や あがりていだ待ちゆさ／我<sup>わ</sup>んやたる待ちゆが 里<sup>さと</sup>る待ちゆる  
竹の葉の露は、東から上がる太陽を待つ（乾かしてくれるから）／私は誰を待つか、恋人を待つ

\* 昔から東に竹を植える習慣あったのではないか。竹（だき＝抱），がじゅまる（集まる，むら

がる), ゆしんぎ (寄せる) などを必ず屋敷内に植えて, 「幸せを寄せ集めて抱く」とした。

65. 名護<sup>なぐ</sup>ぬなんがにく 馬はらちいそさ / 船走<sup>ふに</sup>らちいそさ 那覇<sup>んなとう</sup>ぬ港  
名護のナン兼久 (馬場があった) の浜は, 馬を走らせて面白い / 船を走らせて面白いのは, 那覇の港

\* R 2 3 7

66. ヒチャマガぬ水や 石からが湧<sup>み</sup>ちゅら / ヒチャマ<sup>み</sup>美童<sup>くとう</sup>ぬ 言葉<sup>ことば</sup>ぐばさ  
崎山川の水は, 石から湧くのかな (石灰が入って固い) / 崎山の娘の, 言葉のきついことよ

\* 他シマの男が言い寄ってはねつけられたのか, そのきつさを水のせいにした

67. ひちゅび<sup>ぐわ</sup>小<sup>こ</sup>\*<sup>ふ</sup>に惚<sup>ふ</sup>りてい 謝名<sup>しゃな</sup>ぬ前<sup>め</sup>ん通<sup>かゆ</sup>てい / 通<sup>みじ</sup>てい珍<sup>め</sup>らさや シカぬうなじ  
野苺につられて, 謝名に通い / 通って珍しいのは, シカー (謝名にある川) の鰻<sup>\*2</sup>

\* 1 小さくておいしい野苺

\* 2 珍しい白いうなぎだった。おばあちゃんもよく見に行ったらしい。

68. ユブシク<sup>ぶ</sup>\*<sup>ふに</sup>に登<sup>のぼ</sup>てい 手さじ持<sup>む</sup>上<sup>ちや</sup>ぎりば / あや船<sup>ふね</sup>ぬなりや ちゅみど見<sup>み</sup>ゆる  
ユブシクに登って, 手拭いを振ると (船出を見送る情景) / 立派な船 (美称) の影が, 一瞬見えただけ

\* 1 ユブシクムイ 謝名の, 長い山の右の山

69. いった門<sup>かど</sup>に待ち<sup>まち</sup>ゆみ かじまやに待ち<sup>まち</sup>ゆみ / なりばかじまやや ましやあらに  
あなたの家の門に待とうか, 十字路に待とうか / できれば十字路が, 良いのではないか (自分の家にくるよりは)

70. ぬがよかんたる わがすみぬかなや / すみりばん浅<sup>あ</sup>地 色やし<sup>いろ</sup>かぬ  
どうしてこうなってしまったのか, わが愛しい人よ / 染めても染めても 色が着かない (思いを寄せても返ってこない, 自分の思いを受け止めてくれない)

71. りかよたちわから やわんしじるしが / やがていあかちぬ 鶏<sup>と</sup>や鳴<sup>な</sup>ちゅさ  
さあもう帰ろう, 夜半過ぎてしまう / やがて暁の, 一番鶏が鳴くよ

72. あきよはいふねい たばた草でいるが / うり知らんわらび 松<sup>まつ</sup>ぬ緑  
ああ走る船 二股に分かれた草はどれか / それを知らぬ童は 松の緑の葉\* (まだ子供だ)

\* 松葉のことだよといっていた。全体に意味不詳。他の上句と入れかわったのかもしれない。

73. 鶏<sup>と</sup>ぬうてえらばん ゆやあきていくいるな / かなしうみ<sup>さと</sup>里<sup>さと</sup>とう はなしなかば  
鶏は歌おうとも, 夜は明けてくれるな / 愛しい思い人と, 話し半ばだ

74. 里<sup>さと</sup>やとうじかめい わんやうとうむちゅさ / うとうむちやいいきば わらてい  
くいるな

愛人は妻をめとり, 私も夫を持つ / 夫を持つけど, 笑って呉れるな (一番好きな人ではないけど)

75. 雨<sup>あめ</sup>ふらい\*でいしば てんぬむよ変わてい / うとうふらいでいしば ちらぬかわ  
てい

雨が降りそうになると, 天の模様が違って / 夫を振ろうとすると (いうことをきかないと), 顔つきが変わって

\* 雨が「ふる」と夫を「ふる」をかけた

\* R 2715

76. あがりうちむかてい 泣ちいちゆるタベル\*<sup>1</sup>／くぶぬハナミイミが まぶいだまし

東に向かって、泣いて（飛んで？）いく蝶々は／窪（窪地にある家の屋号）のハナ兄の、靈魂だ

\* 1 死んだ人の魂にたとえて「泣いている」としたか、飛んでとすべきなのか

\* 卑近なことを歌にする、と父が笑う歌。

\* R 412

77. ふちゆくいかんていちゆらさ サンダヤーぬマホイ\*<sup>1</sup>／からじゆていちゆらさ\*<sup>2</sup>  
ブツカマダ\*<sup>3</sup>

風呂敷を被って美しいのは、サンダヤーのマホイ／髪を結って美しいのは、ブツカマダ

\* 1 マハのこと。マハ名はたくさんあった。

\* 2 髪を結って美しい人が美人とされたので、豊かな黒髪が美人の象徴だった。

\* 3 ハニシヌヤー（母の実家）につかえた女、ブツは屋号、ふとっちょという意味あり。  
おばあちゃんの夫の母の名を（アンダハマダ）入れることもあり、とてもきれいな人で、ウタガキされた（歌に詠まれた）という。

78. ならんどうりいちゃと 親<sup>うや</sup>ぬ酒かみてい／我<sup>わ</sup>んや夫<sup>うと</sup>むちゃが なくしたていてい

いやよといってるのに、親が杯をかわしてしまつて／私は婚約者がいるよと、難癖をつけられる（うわさがたってしまった）

79. たばくふけ語ら 結びどやミンサ／うりからる縁や ちかくないさ  
煙草を吹いて語ろう、結ぼうミンサー帯／それからの縁は、近くなるよ（気楽にいこうぜ）

\* R 2791

80. ぴーさらばんにじり やーさらばんにじり／継親<sup>まもうや</sup>ぬびれや あねるあいさ

寒くても我慢、腹減っても我慢／継親とのつきあいは こういうものだよ

81. 雨<sup>あめ</sup>ぬ降<sup>ふ</sup>てい晴<sup>は</sup>りてい 草<sup>くさ</sup>はや\*<sup>1</sup>があわり／うりゆかんあわり 辻<sup>つみ</sup>ぬじゆり小  
雨が降っても晴れても、草刈りの下男が哀れ（家畜に食べさせねばならないから）  
／それよりも哀れなのは、辻の遊女

\* 1 草が生えている処をさがして刈り取る意。12, 3才の子供が下男として、借金の利息分を働くことが多かった

82. 十七、八ぐるる 花ん咲かりゆる／二十<sup>にじゅう</sup>あまていからや やむちすがい  
17, 8才のころが、花の盛りだ／二十才すぎてからは、家持ち（結婚）の準備

83. 遊び<sup>あし</sup>じちやてい ちゆぬ島<sup>しま</sup>んかゆる／しちみそり里<sup>さと</sup>前<sup>め</sup> なうちふりら  
遊び好きだから、他島へもかよう／弾いてみて下さいあなた、すぐうち惚れましょう

84. たまたがき里や ふち草るやゆる／あねぬふち草に 我<sup>わ</sup>ちむくいたが  
二股掛ける人は、浮き草なのだ（根が地についていない、いい加減だ）／あんな

浮き草に、どうして私の心を呉れた（恋をした）か

85. 仲島に五日 渡ん地に五日／辻に十日 うたとうちんとう二十日

仲島に五日，渡ん地に五日／辻に十日，居たからちょうど二十日

\* 足し算だな，と笑っていた。遊郭にも階級があり，辻が一番上だったのではないか。

\* S 17世紀後半以来，那覇の仲島，渡ん地，辻の3カ所に遊郭があったが，明治41年，辻に統合された。

付記

以上渡名喜マツさんの歌は，立派なこと，人に聞かせたいこと，良いことをうたう，とする教養主義的な姿勢ではなく，話しをするように気慰めにうたう，という自然なうたいぶりである。身近なこと，折節の細やかな情感や機微，時には人生の指針などがうたい込まれ，気取りも飾り気もない。生きてゆく営みと共にウタがある，ということを示す貴重な記録であるように思う。前号に引き続き，渡名喜一江さんに補筆訂正していただいたことを記して感謝申し上げます。（酒井記）

参考文献

島袋盛敏 1964『増補 琉歌大観』沖縄タイムス社

外間守善ほか（編）1980『南島歌謡大成 沖縄篇 下』角川書店